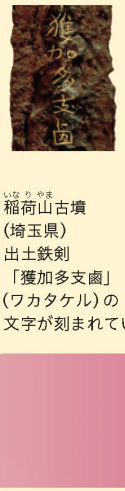
古典から近現代へとつながっていく、**言語文化という科目の学習を概観**することができます。

言語文化の変遷

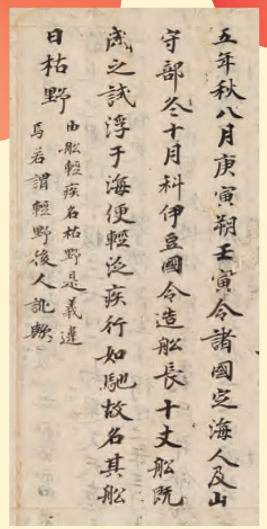
五世紀頃



稲荷山古墳（埼玉県）出土鉄剣「獲加多支鹵」（ワカタケル）の文字が刻まれている

もともと日本語には文字がなかったが、中国との交易を通じて漢字が伝来した。

七世紀頃



『日本書紀』

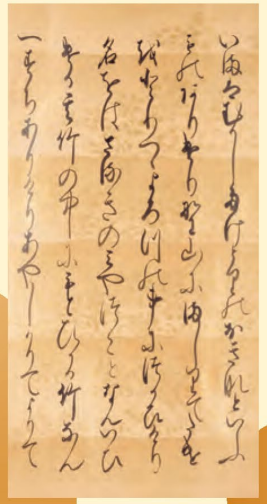
漢文を読むだけでなく、漢字・漢文を使って物事を表現するようになった。

七世紀後半

『万葉集』

漢字の音や訓を、日本の言葉にあてはめて表記するようになった。

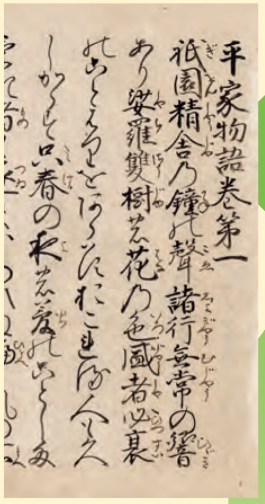
九世紀頃



『竹取物語』

漢字をもとにして「かな」が発明された。

十三世紀頃



『平家物語』

和文体と漢文訓読体を融合させた「和漢混淆文」が生まれ、明治時代まで書き言葉の主流となった。

十九世紀

二葉亭四迷『浮雲』

千早振る神無月も最早跡二日の余波となッた廿八日の午後三時頃に神田見附の内より塗渡る蟻、散る蜘蛛の子とうようよぞよぞよ沸出でて来るのは孰れも顋を気にし給ふ方々、……

近代になって、話し言葉と書き言葉を近づける運動がおこり、「言文一致体」が登場した。

二十世紀

壺井栄『二十四の瞳』

歩いてくるとばっかり思っていた女先生は自転車をとばしてきたのだ。自転車にのった女先生ははじめてである。洋服をきた女先生もはじめて見る。はじめての日に、おはよう！　とあいさつをした先生もはじめてだ。

一九四六年に「現代かなづかい」が定められ、現在の表記法となった。

? 未来の日本語

各時代を代表する表記法や文体に関するビジュアル資料から、「言語文化」の学習がスタートします。

第１単元では、**古文・漢文それぞれの導入教材**を配置しています。

古文の世界へ

時代を越えて生き続けてきた古文の世界にふれることで、私たちは古人の心を知ることができる。それぞれの時代を背景に、現代の私たちとは異なるものの見方や生活がそこにはある。また、昔も今も、そしておそらくはこれからも変わることのない喜びや悲しみ、苦悩や価値観がそこにはある。数知れぬ先人たちが古文の世界にふれ、それぞれの思いを積み重ねてきた。その世界に何を見つけ出すのか、それは個々の読み手にゆだねられている。どんな出会いが待っているか、古文を読むことの魅力はそこにある。

主に文字の形で享受されてきた古文の世界は、たとえば絵画として（絵巻物など）、舞台芸能として（歌舞伎など）、遊びとして（百人一首カルタなど）、文化全般にわたって広がっている。また、散る桜に美しさとともにはかなさを感じ、中秋の名月に目を奪われる古人の感性は、現代を生きる私たちにも受け継がれている。古文を読むことで、私たちは自らの文化の源と出会い、その継承者として歴史の一部につながることができるのである。

いろは歌

いろはにほへと　ちりぬるを
色は匂（にほ）へど　散りぬるを

わかよたれそ　つねならむ
我が世誰ぞ　常ならむ

うゐのおくやま　けふこえて
有為の奥山　今日越えて

あさきゆめみし　ゑひもせす
浅き夢見じ　酔ひもせず

花の色は美しいけれど、いつかは散ってしまうものだが、人の世も同じで、いったい誰が変わらず永遠であるだろう。変わりやすくはかないこの世の奥山（煩悩（ぼんのう））を、今日越えて、浅く変わりやすい夢は見まい、酔（よ）いしれるようなこともなく。

いろは歌　平安時代中期までには成立していたといわれる歌で、当時使われていた四十七の仮名を全て一回ずつ用いて作られている。

「古文の世界へ」では、古文学習へのいざないとして、**「いろは歌」**を取り上げています。

漢文の導入教材では、**漢文が日本の言葉や文化に与えた影響**について解説しています。

漢文の世界へ

日本の人々は中国から日本に伝えられた書物を読むことを通して中国の文化を知った。大陸の豊かな文化を吸収することで、言語・文学・思想をはじめとする日本の文化は大いに発展した。また、固有の文字をもっていなかった日本人は、漢字を文字として使用しながら、やがて漢字から日本独自の文字としてのひらがなやカタカナを新たに作り出した。

漢文は過去のものではない。現代語の熟語も漢文の基本構造に従って成り立っているし、「蛇足」などの故事成語も広く用いられている。また、『論語』などにみえる儒教の精神は長く日本人の価値観を形成してきた。漢文を読むことで、ふだんは意識せずに使っている言葉について、その構造や本来の意味を再発見することも多いだろう。また、日本語とは異なる特徴をもつ漢文を学び、日本とは異なる文化をもつ古代中国を知ることで、日本語や日本文化を再発見することも多いだろう。漢文を通して新たな世界が見えてくるに違いない。

漢文の格言

少年易老、学難成。
少年老い易く、学成り難し。
若者はすぐに年をとり、学問はなかなか成就しない。

一寸光陰不可軽。
一寸の光陰軽んずべからず。
僅かな時間もおろそかにしてはいけない。

不入虎穴、不得虎子。
虎穴に入らずんば、虎子を得ず。
虎のすむ穴に入らなければ、虎の子を捕まえることはできない。

他山之石、可以攻玉。
他山の石、以て玉を攻むべし。
よその山の石ころでも、それを用いて宝玉を磨くことができる。

不為児孫買美田。
児孫の為に美田を買はず。
子孫のために財産を残すことはしない。

「漢文の世界へ」では、漢文学習へのいざないとして、**漢文由来の格言**を取り上げています。

一つめの古文本編教材としては、古文入門としても定評のある「児のそら寝」を、**傍訳付き**で取り上げます。

言語文化

古文に親しむ

学習活動

1 本文を繰り返し音読し、リズムや響きを感じ取ろう。

2 「僧たち」が笑った理由を話し合おう。

児（ちご）のそら寝（ね）

❶今は昔、❷比叡（ひえ）の山に児❸ありけり。僧たち、宵（よひ）*のつれづれに、

今となっては昔のことだが、比叡山延暦寺に児がいた。僧たちが、宵の退屈さのために、

「いざ、かいもちひせむ。」と言ひけるを、この児、心寄せに聞きけり。

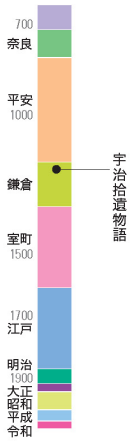
「さあ、ぼた餅を作ろう。」と言ったのを、この児は、期待して聞いていた。

さりとて、し出ださむを待ちて寝ざらむも、わろかりなむと思ひて、

そうかといって、作りあげるのを待って寝ないのも、（きっと）よくないだろうと思って、

片方（かたがた）に寄りて、寝たる由（よし）にて、出で来るを待ちけるに、

（部屋の）片隅に寄って、寝たふりをして、できあがるのを待っていたところ、



❶**今は昔** 説話の書きだしの決まり文句。

❷**比叡の山** 比叡山（ひえいざん）。京都府と滋賀県の境にある。ここでは比叡山延暦寺（えんりやくじ）のこと。

❸**児** 学問や行儀作法を習うため、寺院に預けられていた貴族などの子弟。

▼問 「ひしめき合ひたり」とは、誰のどのような様子か。

❹**もの申し候はむ** 丁寧に呼びかける言葉。

一つめの漢文本編教材としては、現代にも残る故事成語２点を取り上げます。最初の「借虎威」は**傍訳付き**です。

言語文化

漢文に親しむ

学習活動

1 本文を繰り返し音読し、リズムや響きを感じ取ろう。

2 「虎の威を借る」や「蛇足」という言葉があてはまる物事を身のまわりから探して、発表しよう。

故事二編

借虎威（ルニ虎ノ威ヲ）

虎求百獣而食之。❶得狐。

虎は動物たちを探し求めてはこれを食べていた。狐を捕まえた。

狐曰、「子無敢食我也。❷天帝

狐が言うには、「あなたは決して私を食べてはいけません。天の神が

使*我長百獣。今、子食我、是逆

私を動物たちの王にしたのです。今、あなたが私を食べたなら、

❶**之** 「百獣」を指す。

❷**天帝** 万物をつかさどる天の神。

単元の目標は学習指導要領の指導事項をもとに設定されており、**カリキュラムやルーブリック**をつくりやすく、**観点別評価**にもつながります。

二次元コードから、**作品解説や古典文法解説動画、知識・技能デジタルドリル**（語句・漢字）などの学習コンテンツにアクセスできます。

2

構成や展開について考える

各単元は、**3種の文章（古文・漢文・近現代以降の文章）**を中心に構成されています。

文章の構成を捉える

絵仏師良秀（宇治拾遺物語）

話の展開を整理する

十八史略　鶏口牛後／先従隗始　曾先之

登場人物の心情の変化とその契機を捉える

羅生門　芥川龍之介

作家とよむ「今昔物語集」　福永武彦

コラム

- 「絵仏師良秀」と「地獄変」
- 三国志を楽しもう
- 羅城門には鬼が棲む

古典の読解力を高められるよう、定評のある教材を厳選して掲載しています。

構成や展開

文章の構成を捉える

学習活動

1 絵を描くことに対する「良秀」の姿勢についてまとめよう。

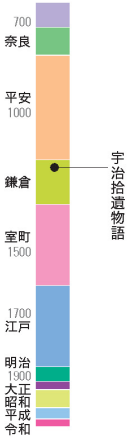
2 最後の一文があることによって、どのような効果が生まれているか、話し合おう。

教材冒頭に、学習目標を達成するための課題を「学習活動」として提示。何を目指して、何をやるかが明確です。

絵仏師良秀（りやうしう）

これも今は昔、絵仏師良秀といふありけり。家の隣より火出（い）で来て、風おしおほひてせめければ❷、逃げ出でて、大路（おほぢ）へ出でにけり。人の書かする仏もおはしけり。また、衣着（きぬ）ぬ妻子（めこ）なども、さながら内にありけり。*それも知らず、ただ逃げ出でたるをことにして❸、向かひのつらに立てり。

見れば、すでにわが家に移りて、煙（けぶり）、炎、くゆりけるまで、おほかた、向かひのつらに立ちて眺めければ、「あさましきこと。」*とて、人ども来と



❶ **絵仏師良秀** 伝未詳。「絵仏師」は、仏画を専門に描く絵師。

❷ **せめければ** 迫ってきたので。

▼問 「それ」とは何か。

❸ **ことにして** よいことにして。

❹ **向かひのつら** 道の向かい側。

❺ **しつるせうとくかな** 大変な得をしたなあ。

▼問 何を「わろく書きける」なのか。

❻ **物** ここでは、人にとりついて正気を失わせる霊の類。

❼ **なんでふ** 反語表現。どうして…か、いや…ない。「なにといふ」が変化したもの。

❽ **不動尊** 不動明王のこと。憤怒（ふんぬ）の表情で、右手に剣、左手に縄を持ち、背に火炎を負っている。

▼問 「この道」とは何か。

❾ **わ党たち** おまえたち。

❿ **させる能** これといった才能。

⓫ **よぢり不動** 背後の火炎がよじれるように昇っている不動尊の像をいうか。

＊語句

おはす／さながら／あさまし／いかに／年ごろ／悪し／心得／だに／めづ

宇治拾遺物語 27ページ参照。

ぶらひけれど、騒がず。「いかに。」*と人言ひければ、向かひに立ちて、家の焼くるを見て、うちうなづきて、時々笑ひけり。「あはれ、しつるせうとくかな❺。年ごろはわろく書きけるものかな。」*と言ふときに、とぶらひに来たる者ども、「こはいかに、かくては立ち給（たま）へるぞ。あさましきことかな。物❻のつき給へるか。」と言ひければ、「なんでふ❼、物のつくべきぞ。年ごろ、不動尊❽の火炎を悪（あ）しく書きけるなり。今見れば、かうこそ燃えけれと、心得つるなり。これこそ、せうとくよ。この道を立てて世にあらむには、仏だによく書き奉（たてまつ）らば、百千の家も出で来なむ。わ党たち❾こそ、させる能❿もおはせねば、物をも惜しみ給へ。」と言ひて、あざ笑ひてこそ立てりけれ。

そののちにや、良秀がよぢり⓫不動とて、今に人々めで合へり。*

（宇治拾遺物語）

良秀様（よう）不動明王図像
（鎌倉時代前期）

注釈、発問、重要語句など、丁寧な脚注がスムーズな読解を助けます。

教材冒頭に掲げた「学習活動」に取り組むための、**補助的・段階的な問い**を設定しています。

学習活動のために

- 本文中に二度出てくる「あさましきこと」（60・6、61・4）とは、それぞれどのようなことを指すか、説明してみよう。
- 「良秀」にとっての「せうとく」とは何か、説明してみよう。
- 最後の一文がない場合、「良秀」の言動に対する印象はどのように変わるか、書き出してみよう。

語彙

自動詞と他動詞

自動詞とは「（○○が）××する」など、主語そのものの動作や作用を表す動詞である。他動詞とは「□□を××する」など、他に対するはたらきかけを表す動詞で、前に「～を（に）」を補うことができる。

次の❶❷の「立つ」は自動詞と他動詞のどちらだろうか。

❶「向かひのつらに立ちて」（60・6）

❷「平らかに願立つ」（土佐日記）

❶「立ち」は、「道の向かい側に立って」という意味で、主語の動作を表す自動詞である。❷の「立つ」は「無事であるようにと神仏に願を立てる」という意味なので、他（願）に対するはたらきかけを表す他動詞である。

「自驚く」と「他驚かす」、「自流る」と「他流す」のように、終止形（言い切りの形）が異なる動詞もあるが、「立つ」のように自動詞と他動詞の終止形が同じものもあり、その場合は文脈から判断する必要がある。また古文では、「が」「を」などの助詞が明記されないことも多いので注意したい。

「焼く」「裂く」「破る」などの動詞で、自動詞と他動詞で意味や活用の種類がどのように異なるか、調べてみよう。

読解の手助けとなる表現や、言葉の文化的背景を中心に解説しています。

文法事項を、**コラム形式でわかりやすく**解説。古文の読解を支える基本的な知識を、段階的に習得できます。

古文を読むために 2

用言・活用

資料編 272ページ「用言活用表」

「絵仏師良秀」に出てくる言葉の中に、現代語と少し異なるものがあることに気づいただろう。例えば、次の部分。

家の焼くるを見て、（61・1）

「（家が）焼ける」という意味だが、現代では「焼く」「焼ける」と言うことはあっても、「焼くる」とは言わない。「焼くる」の言い切りの形（終止形）は「焼く」であり、後ろの言葉に続けるために語形が変化して「焼くる」となっている。このように文中の単語の形が変化することを**活用**という。現代語と古語とでは活用の仕方（**活用の種類**）が異なっている。

例語	語幹	活用語尾 未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形	活用の種類
現 焼ける	焼	-e け	-e け	-e ける	-e ける	-e けれ	-e けよ けろ	下一段活用
古 焼く	焼	-e け	-e け	-u く	-u くる	-u くれ	-e けよ	下二段活用

現代語「焼ける」は、エ段の一段だけで活用しているので、下一段活用である。一方で、古語「焼く」はウ段とエ段の二段にまたがるので、下二段活用である。同じ意味の語であるが、活用の種類が時代とともに変化していったのである。古語の動詞の活用は九種類あったが、現代語では五種類に減っていった。さらに、**活用形**に注目すると、現在の「**仮定形**」は古語では「**已然形**」であったことがわかるだろう。言葉は変わり続ける。現在私たちが使っている言葉も、やがて姿を変えていくことだろう。

●動詞の活用の種類

活用の種類	活用する段		例語
四段活用	ア～エの四段	アイウエオ	言ふ 取る
上二段活用	イ・ウの二段	アイウエオ	過ぐ 恋ふ
下二段活用	ウ・エの二段	アイウエオ	寄す 隔つ
上一段活用	イ段の一段のみ	アイウエオ	見る 居る
下一段活用	エ段の一段のみ	アイウエオ	蹴る
カ行変格活用	カ行の三段	かきくけこ	来
サ行変格活用	サ行の三段	さしすせそ	す おはす
ナ行変格活用	ナ行の四段	なにぬねの	死ぬ 往ぬ
ラ行変格活用	ラ行の四段	らりるれろ	あり 居り

すべての教材の後に、「コラム」を配置しています。

コラム

「絵仏師良秀」と「地獄変」

小説家の芥川龍之介は平安・鎌倉時代の説話を素材とした作品を複数残したが、その中の一つに「絵仏師良秀」を下敷きにした「地獄変」がある。

両者の違いとしては、まず物語の内容があげられる。「地獄変」では、「堀川の大殿」から地獄変（地獄変相図という、地獄の苦しみを描いたもの）の屏風絵を描くように命じられた「良秀」が、写実を追求するあまり弟子を縛りあげて苦しむ姿を写し取ったり、檳榔毛の車に乗った女房が焼け死ぬさまを描くために実際に車を焼いてほしいと「大殿」に願い出たりする。願いがきき入れられて火をつけられた車に愛する娘が乗せられていると知った「良秀」は、その様子を恍惚とした表情で眺め、屏風絵を描き上げた後に自ら命を絶つ。

なお「絵仏師良秀」にはない〈屏風絵を描く〉という展開は、『古今著聞集』巻十一「弘高の地獄変の屏風絵を書ける次第」をもとにしたとされる。入魂の屏風絵を描き終えた「弘高」が、「おそらくは、わが運命尽きぬ」と語り、まもなく死んでしまったというものである。

「絵仏師良秀」と「地獄変」の違いでもう一つ気をつけたいのが、「良秀」の人物像である。「絵仏師良秀」の「良秀」にはなんの葛藤もなく、笑いながら「仏だによく書き奉らば、百千の家も出で来なむ」と言い切り、妻子についてはふれることすらない。「地獄変」の良秀は、世の中の慣習や道徳にとらわれないところは「絵仏師良秀」の「良秀」と同じだが、愛娘を助けるか、最上の屏風絵を描くために地獄の苦しみを目に焼きつけるかで葛藤する。近代の精神によってつくり出された「地獄変」の「良秀」は、自分という存在に対して自覚的であり、自分で自分の生き方を選択する中で葛藤に苦しむのである。古典を題材にこうした自己や自我のありようを描くことこそが、作者である芥川のねらいだったのかもしれない。

一方で、「絵仏師良秀」の「良秀」には、近代的な理性にとらわれない大らかさが感じられるところもある。近代文学と古典文学、両者の魅力を探しながら読んでみるのもいいだろう。

教材から時代背景に話題を広げたり、現代の生活につながる要素を紹介したりする内容で、**「言語文化」に対する興味・関心や知識を広げる**ことをねらいとしています。

構成や展開

話の展開を整理する

学習活動

1 「鶏口牛後」「先従隗始」はそれぞれどのような話か、あらすじをまとめよう。

2 「鶏口」「牛後」「死馬」「千里馬」は、それぞれ何をたとえているか、まとめよう。

十八史略

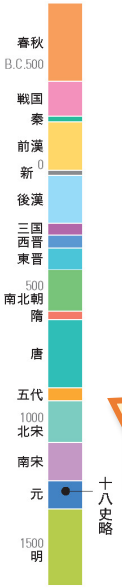
曾先之

鶏口牛後

中国の戦国時代には、秦・楚・燕・斉・韓・魏・趙の七つの強国が競い合っていた。「戦国の七雄」と称されるそれらの中で、西方の秦が最も強大となった。他の六国は、秦への対応を誤れば、すぐにも国が滅亡しかねない状況にあった。

秦人恐喝諸侯。求割地。有洛陽人蘇秦。游説秦恵王、不用。乃往説燕文侯、与趙従親。燕資之、以至趙。説粛侯曰、「諸侯之卒、十倍於秦。并力西向、秦必破矣。為大王計、莫若六国従親以擯秦。」粛侯乃資之、以約諸侯。蘇秦以鄙諺説諸侯曰、「寧為鶏口、無為牛後。」於是六国従合。

戦国時代要図



漢文では、中国の年代による「成立年代バー」を付しています。

❶ **洛陽** 現在の河南省洛陽市。

❷ **蘇秦** [?～前三一七] 戦国時代の遊説家。

❸ **秦恵王** 秦の君主。在位は前三三七年～前三一一年。

❹ **燕文侯** 燕の君主。在位は前三六一年～前三三三年。

❺ **従親** 南北の国が同盟を結ぶこと。

❻ **資** 金品を与えて援助する。

❼ **粛侯** 趙の君主。在位は前三四九年～前三二六年。

▼**問** 「大王」とは誰か。

❽ **鄙諺** 世間で言われていることわざ。

❾ **於是** そこで。

＊**語句**

与〈と〉 Aと。

莫若A〈A二しクハなシ〉 Aに及ぶものはない。[比較]

寧A、無B〈むしロAストモ、Bスル(コト)なカレ〉 いっそAするとしても、Bするな。[選択]

注釈、発問、重要語句・句法など、丁寧な脚注がスムーズな読解を助けます。

学習活動のために

[鶏口牛後]

◉「蘇秦」は「粛侯」にどうすることを説いたのか、説明してみよう。

[先従隗始]

◉「涓人」が死んだ馬の骨を買って帰ったのはどう考えたからか、説明してみよう。

漢文を読むために 3

一（竪点・ハイフン）

二字以上の熟語に返るときは、熟語の間に「一」（竪点・ハイフン）をつける。返り点はハイフンの左側につく。

師二事之一。 之に師事す。

語彙

「いふ」という語

漢文を読んでいると「いふ」という意味と読みとをもつ語がいくつもあることに気づく。それぞれの「いふ」には独自の意味がある。

❶【言ふ】 話す／議論する／説く／告げる／表現する／誓う

子曰く、「与に言ふべくして、之を言はざれば、人を失ふ。」と。（『論語』衛霊公第十五）

孔子は、「ともに議論しあうべき人と、議論しないのは、人を失う。」と言った。

❷【曰ふ】 言う／説く／名づける ※多くの場合「曰く」の形で使われる

子曰く、「巧言令色、鮮し仁。」と。（『論語』学而第一）

孔子は、「巧みな言葉や、媚びへつらうような顔つきをする人は、思いやりが少ない。」と言った。

❸【云ふ】 みずから言う／他人の発言を引用して言う

詩に云ふ、「於戯、前王忘れられず。」と。（『大学』章句）

『詩経』の周頌烈文篇には「ああ、前代の王（周の文王・武王）たちのことが忘れられない。」とある。

❹【謂ふ】 話しかける／人や物事を評論する／名づけ呼ぶ

子、子貢に謂ひて曰く、「女と回と孰れか愈れる。」と。（『論語』公冶長第五）

孔子は子貢に話しかけて、「おまえと顔回とどちらが優れているか。」と言った。

漢文における特徴的な語彙への気づきを促し、読解のポイントを押さえます。

コラムでは、**現代の文化とのつながり**を、写真や図版資料を豊富に用いて紹介します。

コラム 三国志を楽しもう

中国の後漢末期から三国時代（一八〇年頃～二八〇年）、群雄が割拠し、魏・呉・蜀の三国が争ったこの時代は、乱世を生きぬいた人々の逸話が数多く残されている。『三国志』もその時代を描いた歴史書の一つである。それらの物語は後世の文人たちによって語り継がれ、また、さまざまな作品に取り込まれたが、『十八史略』もその一つである。

明の時代（一三六八年～一六四四年）になると、小説『三国志演義』が著された。時世の栄枯盛衰の中に、英雄豪傑の奇想天外な活躍ぶりを盛りこんだストーリーは、多くの読者を虜にした。日本でも江戸時代に日本語訳が出されて一躍大ブームとなった。今日、『三国志演義』の世界は、直接に現代語訳されたものから、読みやすくアレンジされた小説、漫画やゲーム、舞台にまで広がって、私たちの身近なものとなっている。

▲「三国志」を題材にしたゲーム

▲吉川英治の小説
▶横山光輝の漫画

◀『パリピ孔明』（原作・四葉タト、漫画・小川亮）は、現代の日本に転生した諸葛亮の活躍を描いた漫画。テレビアニメやドラマなどにもなり、話題を呼んだ。

教材のねらいや学習活動の示し方が共通なので、単元内でスムーズに**学習を積み上げていく**ことができます。

構成や展開

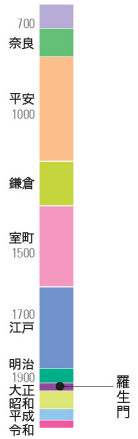
登場人物の心情の変化とその契機を捉える

学習活動

1 次の文章を読み、「下人」の考えがどのように変化したか。また、その変化のきっかけは何か、話し合おう。

羅生門

芥川龍之介



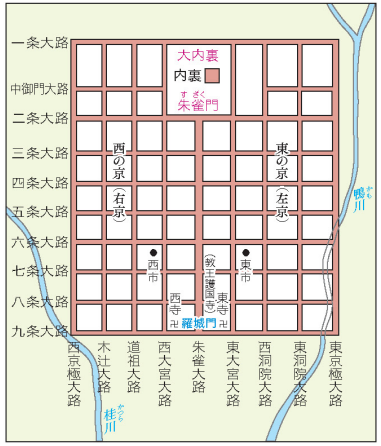
ある日の暮れ方のことである。一人の下人が、羅❶生門の下で雨やみを待っていた。

広い門の下には、この男のほかに誰もいない。ただ、ところどころ丹❷塗りの剝げた、大きな円柱に、❸きりぎりすが一匹止まっている。羅生門が、❹朱雀大路にある以上は、この男のほかにも、雨やみをする❺市女笠や揉烏帽子が、もう二、三人はありそうなものである。それが、この男のほかには誰もいない。

なぜかというと、この二、三年、京都には、地震とか❼辻風とか火事とか飢饉とかいう災いが続いて起こった。そこで洛中のさびれ方はひととおりではない。❽旧記によると、仏像や仏具を打ち砕いて、その丹がついたり、金銀の箔がついたりした木を、道端に積み重ねて、薪の料に売っていたということである。洛中がその始末であるから、羅生門の修理などは、もとより誰も捨てて顧みる者がなかった。するとその荒れ果てたのをよいことにして、狐狸が棲む。盗人が棲む。とうとうしまいには、引き取り手のない死人を、この門へ持ってきて、捨てていくという習慣さえできた。そこで、日の目が見えなくなると、誰でも気味を悪がって、この門の近所へは足踏みをしないことになってしまったのである。

そのかわりまたからすがどこからか、たくさん集まってきた。昼間見ると、そ

❶ **羅生門** 平安京の正面にある「羅城門」。
❷ **丹** 朱色の塗料。
❸ **きりぎりす** コオロギ。
❹ **朱雀大路** 平安京の中央を南北に貫く大通り。



▲上図 平安京略図

❺ **市女笠** 菅や竹皮で編んだ女性用の笠。
❻ **揉烏帽子** 男性が平常服の際に用いたかぶり物。
❼ **辻風** つむじ風。
❽ **旧記** 古い記録。

砕・読 粉砕・**顧**みる 意 省みる

形が似ている漢字や同音異義語なども併記しており、**自学自習**にも活用できます。

語彙

比喩

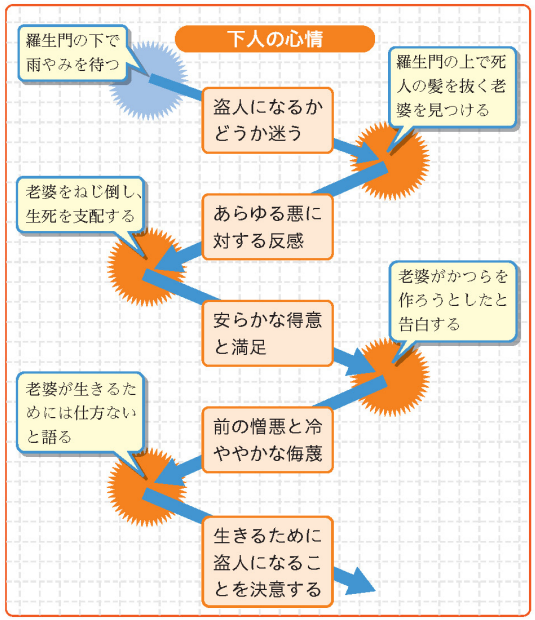
比喩にはいくつかの種類がある。「雨は、羅生門を包んで、遠くから、ざあっという音を集めてくる」（75・7）などの**擬人法**（人でないものを人に見立てる）や、「猿のような老婆」（78・13）などの**直喩**（明喩）**法**（「～のように」などと明示してたとえる）、「雨やみをする市女笠や揉烏帽子が」（72・5）などの**換喩法**（特徴的なもので代替してたとえる）などがある。さまざまな比喩を味わうのも文章を読む楽しみの一つである。

教材に即して、文学の読解のための方略を解説した「物語を読むために」を設定しました。汎用性のある知識・技能を習得し、**文学の読解力**を高めます。

物語を読むために 2

転換点

物語の構成や展開を読み解く中で、転換点が浮かび上がることがある。転換点を意識することで、物語の展開の巧みさとその効果を理解できる。



近現代の文学の中に、**古典作品がどのように息づいているか**を解説したコラムです。

コラム

羅城門には鬼が棲む

芥川龍之介は、『宇治拾遺物語』をもとに「地獄変」、『今昔物語集』をもとに「芋粥」「藪の中」というように、古典の説話を題材にして、近代人の自我と葛藤を描いた。「羅生門」も『今昔物語集』を題材としている（88ページ）。現在は住宅地の中の公園に「羅城門遺址」の碑が残るだけであるが、羅城門とはどんな場所であったのか。

平安京条坊図（300ページ）を見ると、街の中央の北に大内裏が位置し、その南端に応天門がある。そこから南に向かい、京の街の中心を貫いて朱雀大路が延びている。その最南端に羅城門があり、ここがいわば人間の世界の境界線である。平安京の外に一歩踏み出したところには、異形の者たちの魔界が広がっていた。

昔から羅城門には鬼が棲むといわれ、その鬼が登場する話も多く記されている。あやしく屈折した人間の心理を描く背景として、羅城門は最適だったのである。

羅城門遺址（京都市南区）

羅城門の鬼
（鳥山石燕画『今昔百鬼拾遺』）

教材の内容に沿った追加の文章として、「広がる読書」のページを設けています。

広がる読書

作家とよむ「今昔物語集」

福永武彦

▼「羅城門」の訳文と原文

羅城門の楼上で死人を見る話

① 今は昔のこと、摂津の国の田舎から、盗みを働こうと思って京にのぼった男があった。日がまだ暮れないので、羅城門の下に立って人目をしのびながら休んでいたが、北の朱雀門のほうに向かって人がぞろぞろ歩いて行くので、人通りの絶えるまで、門の陰になるほうにまわって様子を見ていた。すると、今度は南の山城の方向から、人がおおぜい近づいて来る様子なので、どっちにしても見られてはぐあいが悪いと思い、門の二階の楼の手すりに、えいとばかり飛びついて、そろそろと這い上がった。すると、中で何やら灯を点しているのが、かすかに見える。

② そこでこの盗賊は、怪しいことだと思いながら、格子窓から中をのぞいて見ると、床の上に、若い女が死んで横たわっている。その枕もとに灯を点して、年のほどももうわからないような、白髪頭の老婆が、乏しい灯先で一本ずつより分けながら、死人の髪を入念に抜き取っていた。

③ くだんの男は、思ってもみなかった光景を目にして、これはもしや鬼ででもあろうか、と怖気づいたが、もともと肝のすわった男なので、ひょっとしたら幽霊かもしれぬ、おどかして正体をたしかめてやれ、と心をきめ、そっと戸を開くと、太刀を引き抜き、

「こいつめ。」と叫びながら、そばへ走り寄った。

④ 老婆は不意をつかれ、あわてて逃げ出そうとしたが、狭いところゆえ、とても逃げられぬと知って、今度は手を合わせて拝み始めた。

「このくそ婆あめ、何をしているのだ？」と男がきくと、老婆は恐る恐る、

「わたしの主人にあたりますお女中が亡くなられて、あとの始末をする人もありませんので、ここに宿をお借りしておりますんですよ。丈にあまるほど長い御髪なので、抜き取って鬘に売ろうとしているところ。どうか命ばかりは許してください。」と答えた。

⑤ そこでこの盗賊は、死人の着ている着物とこの老婆の着ている着物とを剝ぎ取り、ついでに、すでに抜き取ってあった死人の髪の毛も奪い取って、羅城門の楼上から飛び下りると、あとをも見ずに逃げ去った。

⑥ 羅城門のこの楼上には、死人がいつもごろごろしていた。葬式の出せないような死人は、この楼上に捨てておかれた。これは、その盗賊が人に語ったのを、今に聞き伝えた話である。

（巻二九第一八話）

［参考］

羅城門の上層に登りて死人を見る盗人の語

① 今は昔、摂津の国のほとりより、盗みせむがために京に上りける男の、日のいまだ明かりければ、羅城門の下に立ち隠れて立てりけるに、朱雀の方に人しげく行きければ、人の静まるまでと思ひて、門の下に待ち立てりけるに、山城の方より人どものあまた来たる音のしければ、それに見えじと思ひて、門の上層にやはらかかつり登りたりけるに、見れば、火ほのかにともしたり。

② 盗人、「あやし。」と思ひて、連子よりのぞきければ、若き女の死にて臥したるあり。その枕上に火をともして、年いみじく老いたる嫗の、白髪白きが、その死人の枕上にゐて、死人の髪をかなぐり抜き取るなりけり。

③ 盗人、これを見るに、心も得ねば、「これはもし鬼にやあらむ。」と思ひて恐ろしけれども、「もし死人にてもぞある。脅して試みむ。」と思ひて、やはら戸を開けて、刀を抜きて、「おのれは、おのれは。」と言ひて走り寄りければ、

④ 嫗、手惑ひをして、手を摺りて惑へば、盗人、「こは何ぞの嫗の、かくはしゐたるぞ。」と問ひければ、嫗、「己があるじにておはしましつる人の失せたまへるを、あつかふ人のなければ、かくて置きたてまつりたるなり。その御髪の丈に余りて長ければ、それを抜き取りて鬘にせむとて抜くなり。助けたまへ。」と言ひければ、

⑤ 盗人、死人の着たる衣と嫗の着たる衣と、抜き取りてある髪とを奪ひ取りて、下り走りて逃げて去りにけり。

⑥ さてその上の層には死人の骸骨ぞ多かりける。死にたる人の、葬りなどえせぬをば、この門の上にぞ置きける。このことは、その盗人の人に語りけるを聞き継ぎて、かく語り伝へたるとや。

（『新編日本古典文学全集』によった。）

福永武彦　一九一八（大正七）年～一九七九（昭和五四）年。小説家、詩人、フランス文学者。福岡県の生まれ。作品に「風土」「風のかたみ」などがある。本文は『今昔物語』（一九九一年）によった。

見開きで完結する文章量なので、限られた時間内での**読み比べ**にも最適です。

単元の最後には、**自らの学習を振り返ってこれからの学習へと生かす**「単元の学習を振り返ろう」を設定しています。各項目は、単元扉に示した学習目標と対応しており、**観点別評価**にもつながります。

単元の学習を振り返ろう

- □ 作品の構成や展開について考えたこと、気づいたことを書き出そう。
- □ 自分自身で、これから深めてみたいと思ったことを書き出そう。

単元の「ことば」

- □ 用言・係り結び
- □ 自動詞と他動詞
- □ 転換点
- □ ー（竪点・ハイフン）
- □ 心情の変化
- □ 比喩・擬人法

ブックガイド

『おもしろ古典教室』

上野誠

古典が嫌いだった著者による古典の楽しみ方。「おもしろいから読む、楽しいから学ぶ」という「古典おもしろ主義」。

『小説十八史略』

陳舜臣

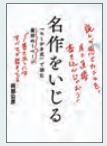
「十八史略」の小説版。「人の追求」をテーマに、豪傑たちの人間模様を鮮やかに描く。

『羅生門・鼻・芋粥』

芥川龍之介

芥川龍之介の初期の短篇十八篇。「鼻」「芋粥」など、「羅生門」と同様「今昔物語集」に取材した作品群を含む。

『名作をいじる』



阿部公彦

「羅生門」や夏目漱石の「三四郎」など、名作の最初の一ページに「らくがき」して「いじる」、新しい読書入門。

『文豪たちの友情』

石井千湖

正岡子規と夏目漱石、芥川龍之介と菊池寛など、十三組の文豪たちの友人関係が垣間見られる、小説の入門書。

『お伽草紙』

太宰治

太宰中期の短編小説集。「浦島さん」「カチカチ山」「舌切雀」など。日本の古典や民話に新たな解釈を与えた作品を収録。

単元テーマや教材の内容に関連した「ブックガイド」を設けました。単元をとおした学びから、**多様なジャンルの読書**へといざないます。

「書くこと」の教材は、春夏秋冬をテーマにした**４つの単元として取り立てて**設定しています。

さまざまな作品を参考にしながら、創作活動に向かうためのイメージをふくらませます。

課題

1 夏を詠んだ短歌を探し、おもしろいと思ったところや気になった表現について話し合おう。

2 一首の中で何がどのように詠まれているか、構成や描写の方法について考えながら、自分が抱えているさまざまな思いを短歌にしよう。

向日葵は金の油を身にあびてゆらりゆらりと高し日のちひささよ

前田夕暮

逆立ちしておまへがおれを眺めてた　たつた一度きりのあの夏のこと

河野裕子

明日消えてゆく詩のように抱き合った非常階段から夏になる

千葉聡

声もたぬ樹ならばもっときみのこと想うだろうか葉を繁らせて

小島なお

空を買うついでに海も買いました水平線は手に入らない

木下龍也

前田夕暮　一八八三（明治一六）年～一九五一（昭和二六）年。歌人。神奈川県の生まれ。掲載歌は『現代短歌集』（一九五七年）によった。

河野裕子　一九四六（昭和二一）年～二〇一〇（平成二二）年。歌人。熊本県の生まれ。掲載歌は『現代の短歌』（一九九一年）によった。

千葉聡　一九六八（昭和四三）年～。歌人、高校教諭。神奈川県の生まれ。掲載歌は『微熱体』（二〇一一年）によった。

小島なお　一九八六（昭和六一）年～。歌人。東京都の生まれ。掲載歌は『サリンジャーは死んでしまった』（二〇一一年）によった。

木下龍也　一九八八（昭和六三）年～。歌人。山口県の生まれ。掲載歌は『つむじ風、ここにあります』（二〇一三年）によった。

ビジュアルな紙面により、さらに想像力をかきたてます。

活動の手順やポイントを丁寧に示すとともに、**具体的な活動例**も掲載しています。

書き方のポイント

「楽しかった」「とても好きだ」のように率直に思いを述べるだけでなく、ふと目にしたものや、忘れられない風景などに思いを託そう。

例）夏休みもうすぐ始まる楽しみだ友を誘って遊びに行こう
→これでは状況と気持ちを説明した散文になってしまう。

思いついたことを全て言い尽くすのではなく、その一部を取り出して短歌にしよう。

学習の振り返り

□構成や描写を工夫して、短歌を作ることができたか。

□新たに気づいたことや考えたこと、これから深めていきたいことなどを書き出そう。

活動例

お題　夏休みを前にした気持ち

作品
麦わらの帽子を机にのせてみる
海へ行くまであと一週間

意識したこと
何を楽しみにしているのか具体的に詠んだ。また、「楽しみだ」と書くのではなく、その気持ちが伝わる動作を詠んだ。

学習の見通しやゴールイメージをもちながら、無理なく取り組むことができます。

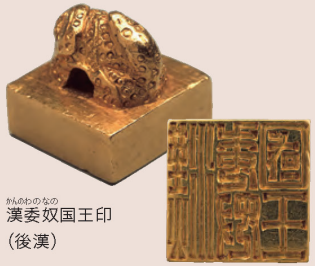
資料編では、言語文化の学習の際に参考にできる情報を厳選して、わかりやすくまとめています。

日本の言語文化史

●個々の作品の成立年代は省略した。
●＊は本教科書掲載の作品。
●横書きの帯では、文字や言葉の大まかな変遷について示している。

上代	
奈良	仏教の伝来 神話・歌謡・口承文芸

漢字の伝来　万葉仮名の創始　漢文訓読の始まり



漢委奴国王印（後漢）

歴史書	古事記
歴史書	日本書紀
歌集	万葉集
漢詩文	文華秀麗集

歴史書	太安万侶・他
舎人親王・他
歌集	未詳
藤原冬嗣・他

中国の古典

老子	
論語＊	
列子	
孟子	
荘子	
韓非子	
史記	
戦国策＊	
説苑＊	
三国志	
文選	

作品の言葉――音読してみよう

伏波は困窮して、智慮いよいよ殖し、禍ひに因りて福と為す。成敗の転ずる、譬へば糾墨のごとし。（南越列伝）

八雲立つ出雲八重垣妻籠みに八重垣作るその八重垣を

父母が頭かきなで幸くあれて言ひし言葉ぜ忘れかねつる（防人歌）

中古	
平安	貴族文化の興隆 女流文学の興隆 貴族文化の衰退と武家の台頭 歴史物語の出現 説話の発展 歌学の発展

中世	
鎌倉	平家琵琶の流行

仮名文字の創始　仮名書道の興盛　和漢混淆文の発達

物語	竹取物語
歌集	古今和歌集
歌物語	伊勢物語＊
日記	土佐日記
日記	蜻蛉日記
随筆	枕草子＊
日記	和泉式部日記
物語	源氏物語＊
日記	紫式部日記
詩歌集	和漢朗詠集
歴史物語	栄花物語
日記	更級日記
歴史物語	大鏡
説話	宇治拾遺物語＊
歌謡	梁塵秘抄
歌集	新古今和歌集
随筆	方丈記＊
軍記物語	平家物語＊
歌集	小倉百人一首＊
説話	沙石集

未詳
紀貫之・他
未詳
紀貫之
藤原道綱母
清少納言
和泉式部
紫式部
紫式部
藤原公任
未詳
菅原孝標女
未詳
未詳
後白河法皇
藤原定家・他
鴨長明
未詳
藤原定家
無住

十八史略＊

李白＊　杜甫＊　柳宗元　韓愈　白居易＊　杜牧＊

やまとうたは、人の心を種として、よろづの言の葉とぞなれりける。（仮名序）

男もすなる日記といふものを、女もしてみむとて、するなり。

元永本『古今和歌集』（平安時代　藤原定実筆）

東路の道の果てよりも、なほ奥つ方に生ひ出でたる人、いかばかりかはあやしかりけむを、いかに思ひ始めることにか、世の中に物語といふもののあんなるを、いかで見ばやと……

先つころ、雲林院の菩提講に詣でて侍りしかば、例人よりはこよなう年老い、うたてげなる翁二人、嫗と行き合ひて、同じ所にゐぬめり。

図版資料も交え、文学史を**楽しく学べる**紙面となっています。

古文重要語を、**学びやすい辞典形式**でまとめたページを用意しています。

基本古語辞典

それぞれ主な意味を掲げた。
▼印…教科書の主なページ
▽印…参照する他の語

あ

あさまし（形シク）①驚くばかりだ。②興ざめだ。③情けない。④見苦しい。みすぼらしい。⑤あさはかだ。▼60

＊本来は、良しあしにかかわらず「①驚くばかりだ」という意味だが、悪いほうに偏っていった。

あし【悪し】（形シク）①悪い。②不快だ。③卑しい。みすぼらしい。④不都合だ。▽よし▼61・99・259

＊「あし」は絶対的に悪いことに対する嫌悪感を表す。相対的に悪いことは「わろし」。「あし」の対義語は「よし」、「わろし」の対義語は「よろし」。

あした【朝】（名）①朝。②明くる朝。

あながちなり【強ちなり】（形動）①無理やりだ。一方的だ。②ひたむきだ。いちずだ。

＊熱心な様子を、①は否定的に、②は肯定的に捉えている。

あはれなり（形動）①しみじみとして風情がある。②かわいい。いとしい。③かわいそうだ。④悲しい。⑤情がこまやかだ。▼61・199・258

あまた【数多】（副）数多く。たくさん。大勢。▼136・258

あやし（形シク）一【奇し・怪し】①霊妙だ。神秘的だ。②奇異だ。異様だ。③不審だ。二【賤し】①卑しい。身分が低い。②みすぼらしい。粗末だ。類いやし。対あてなり・やんごとなし。

＊本来は、人知を超えた不思議なものに対する畏れの気持ちを表した。そこから「普通ではない、不審だ」と意味が広がった。

ありがたし【有り難し】（形ク）①めったにない。珍しい。②できそうもない。③（めったにないほど）尊く優れている。類めづらし・まれなり。

ありく【歩く】（動四）①出歩く。②行ったり来たりする。

いたし（形ク）一【甚し】①程度が甚だしい。②優れている。すばらしい。二【痛し】①痛い。苦痛だ。②精神的につらい。▼97・260

いたづらなり【徒らなり】（形動）①無駄である。無益である。類あだなり・はかなし。②かいがない。むなしい。③場所が空いている。④することがなく暇である。▼174

いと（副）①非常に。とても。②全く。本当に。類いとど。▼96・99・258

いふかひなし【言ふ甲斐無し】（連語）①言ってみてもしかたがない。②言う値打ちがない。取るに足りない。③情けない。▼99・134

いみじ（形シク）①普通でない。②優れている。すばらしい。③とてもうれしい。④大変だ。ひどい。▼97・201

＊「程度が甚だしい」という意味で、肯定的にも否定的にも使われる。

いやし【卑し】（形シク）①身分が低い。類あやし。対あてなり・やんごとなし。②下品だ。③みすぼらしい。④取るに足りない。

いらふ（動下二）①答える。②返事をする。③返答する。▼27

うつくし【美し】（形シク）①いとしい。恋しい。②かわいらしい。③立派だ。見事だ。

＊「うつくし」は心情的な美しさである一方、「うるはし」は整っている美しさに対する感情をいう。「きよげなり」はさっぱりした美しさ、「きよらなり」は気品が

漢文の基本形式や訓読で注意する語など、**"かゆいところに手が届く"**必要十分な情報がそろっています。

【漢文の基本形式】

一 基本構造

1 主語―述語（スナリ・タリ）
君怒。（68・6）

2 主語―述語（ス）―目的語（ヲ）
主人驚問其故。（108・2）

3 主語―述語（ス）―於・于（ニ・ト・ヨリ）―補語
吾十有五而志于学。（『論語』）

4 主語―述語（ス）―目的語（ヲ）―於・于（ニ）―補語
孟嘗君列此二人於賓客。（127・3）

5 主語―述語（ス）―補語（ニ）―目的語（ヲ）
（祠者）賜其舎人巵酒。（36・1）

二 基本句形

●ここには、漢文の基本形式の代表的な形を示した。
●用例として、本書から取りあげたものにはそのページを示し、他から引いたものには書名または作者名を記した。

1 否定形

①不レ～（セ）〔～（し）ない。〕
不レ信。（35・1）

②非レ～ニ〔～ではない。〕
我非ニ生而知之者。（209・5）

③無シ～・莫シ～〔～がない。〕
蛇固無レ足。（37・2）
徧問レ客、莫シ能対。（125・6）

④未ダ～（セ）→「三 再読文字」参照。

○二重否定

⑤無シ不レ～（セ）〔～（し）ないものはない。〕
吾矛之利、於レ物無不レ陷也。（『韓非子』）

⑥非レ不レ～（セ）〔～（し）ないのではない〕
非不レ悪レ寒也。（『韓非子』）

○部分否定

⑦不ニ常～（セ）〔いつも～（する）とは限らない。〕
千里馬常有、而伯楽不ニ常有。（韓愈「雑説」）

⑧不ニ必ズ～（セ）〔必ず～（する）とは限らない。〕
有レ徳者、必有レ言。有レ言者、不ニ必ズ有レ徳。（『論語』）

⑨不ニ復タ～（セ）〔二度とは～（し）ない。〕
遂迷不ニ復タ得レ路。（陶潜）

2 禁止形

①勿レ～（スルコト）・無レ～（スルコト）・莫レ～（スルコト）〔～するな。〕
已所レ不レ欲、勿レ施ス於人。（211・2）
無レ道ニ人短、無レ説ニ己長。